

地域情報（県別）

志の高い人と出会え、集患や採用にも好影響―「三郷医介塾」を開く高橋公一院長に聞く◆Vol.1

2019年1月23日（水）配信 m3.com地域版

訪問診療も行う「みさと中央クリニック」（埼玉県三郷市）の高橋公一院長は、地域における在宅医療の質を上げようと、医療関係者が関心の高いテーマを学び合う「三郷医介塾」を定期的で開催している。「施設の素晴らしい取り組みが地域に広まっていない」。三郷医介塾発足の背景には、在宅医療の経験を重ねるなかで高橋院長が抱いた問題意識があった。発足の経緯や具体的な取り組みについて聞いた。

（2018年12月21日にインタビュー、計2回連載の1回目）

――まずは三郷医介塾の概要についてお聞かせいただけますでしょうか。

地域における在宅医療の質の向上を目指して、2、3カ月に1度のペースで開いている勉強と交流の場です。「医介塾」というのは元々、東京のクリニックで事務長を務めていた猪飼大さんが、老人ホームのスタッフと居酒屋でお酒を飲みながら交流を図っていたことに端を発します。そのうちに訪問看護師や社会福祉士、歯科医師なども参加するようになり、“在宅医療関係者による飲みニケーションの場”として定着、「自分のいる地域でもやりたい」と各地で手を挙げる人が増えていったと聞きます。

2012年に始まった医介塾は現在、関東だけではなく、北海道や大阪、熊本、沖縄でも開かれています。医師側から見れば、訪問診療を行えるのは拠点となる医療機関から半径16km圏内と法律で定められているわけですが、施設の開設にはそういった縛りがなく、いろんな所に同じ法人が運営する施設がある。医介塾の普及にはそんな背景もあったのでしょうか。



高橋公一院長

――先生はどんな経緯で三郷医介塾を立ち上げたのですか？

介護事業者が集まるパーティーで猪飼さんとお会いして、医介塾の参加を打診されたことがきっかけです。その時は東京・赤羽での集まりに誘われたんですが、私はこのクリニックを開業した2008年から訪問診療を行っていて、赤羽にも患者さんがいましたから、地域の在宅医療関係者とも顔合わせをしたいと思って参加しました。

その一方で、私は以前から三郷市やその周辺地域にある施設の方々と勉強会を開いていたので、お酒を交えた医介塾のフランクな雰囲気を取り入れればより魅力が増すのではないかと考えたのです。三郷医介塾を立ち上げたのは2015年で、2019年の2月で18回を迎えます。今では市役所の職員や政治家などを含めて毎回50～70人が参加していますが、医介塾の中でも医師が塾長を務め、勉強会も開いているところはありません。

――三郷医介塾では今までにどんなことをテーマにして、どんな形式で勉強会を開いてきたのでしょうか。

テーマは様々で、自宅で老人ホームと同じサービスを受けられる「在宅老人ホーム」の紹介や診療・介護報酬改定の対策など、その時々における医療関係者の関心が高そうなことだったり、おむつの外し方や入所者へのご飯の食べさせ方といった実践的なものだったり。



おむつの取り扱いについて学ぶ三郷医介塾の参加者たち（高橋院長提供）

テーマは私が考えていて、その内容に精通した方に頼んで事例を発表してもらっています。私自身が講演することもあります。勉強会を開く場所は三郷市文化会館で、2、3時間ほど勉強会を行った後に居酒屋かレストランを借り切って懇親会を開くことが多いですね。

——在宅医療の取材では「多職種連携」「情報共有」が頻出の言葉ですが、勉強会を行うと違うものでしょうか。その意義は？

在宅医療はいろいろな人が関わるから自然と情報が広がっていきそうだと思うかもしれませんが、それはあくまでもクリニックや施設の中にとどまることで、地域レベルにまで広がらないことが多いんです。

例えば、流動食を提供しない常食化に成功している施設があれば、別の施設ではスタッフがおむつを外す技術を持っていて入所者の誰もおむつをはいていないといったように、施設によって特徴は異なります。でも、施設間の交流が進んでいなくてそれぞれの良い部分を共有できていないんですね。いろいろな施設を訪問する医師だからこそ気付けたことかもしれませんが、私が以前から勉強会を開いてきたのはこうした課題を解決したかったからです。

——開業医は医師であると同時に経営者でもあります。医介塾の取り組みを通して、経営者として学んだことはありますか。

その場の損得で考えないことでしょうか。医介塾は参加無料で会費もとっていませんから、会場の手配や案内状の送付に人的コストがかかることを考えると、持ち出しが少なくありません。でも、医師としての自分の考えや取り組みを発信できる機会を持つことは在宅医にとっては貴重です。すぐに患者さんが増えなかったとしても、いろいろな人と知り合うことで長期的にみれば増えます。仕事は全てがつながっているもの、そう思いますね。

◆高橋 公一（たかはし こういち）

埼玉県三郷市出身。1996年に埼玉医科大学医学部を卒業後、同大学病院や公立昭和病院などで外科医として経験を積む。池袋病院では外科の医長としてNSTを立ち上げ、入院患者の栄養管理にも取り組んだ。「地元に貢献できる医療を行いたい」と2008年に「みさと中央クリニック」を開業。訪問診療も行う他、地域の在宅医療の質を上げようと関係者が学び合う「三郷医介塾」を定期的で開催している。

取材・文／医療ライター庄部勇太

記事検索

ニュース・医療維新を検索

